二〇二四年度　田園調布学園大学
全学部全学科専攻　共通

国語　入学試験問題

一般選抜（個別試験型）全学統一日程

（注意）
一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
五、試験時間は六〇分です。

受験番号

氏名

（一）　次のⅠとⅡの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ

ここ二年ほど人気を博しているゲームにイングレスというものがあります。グーグルが提供するスマートフォン向けのゲームです。世界中のプレイヤーが二つの陣営に分かれてポータルと呼ばれるaキョテンを奪い合い、陣地を広げて行くのですが、陣地を取ると地図として見たときにアートになったりもします。阪神淡路大震災から二〇周年の二〇一五年一月に、イングレスに不死鳥を模したアートが現れ、ユーザーたちを感動させたことがネット上で話題になっていました。

そのイングレスにしても、ユーザーの創造性を高めている一方で、大勢にゲームをやらせながら地球上の情報をデータとして集積してもいます。私たちが個々にやっている分には楽しいし、創造性が感じられるけれども、実はシステム内の駒として動かされているだけというふうにも考えることができます。

同様に、このシステム社会において私たちはある意味でデータとして存在しているのではないか。一人ひとりが自由意思で生きているように見えるけれども、統計的に処理すれば、実は「私」というのは様々なパラメーターを掛け合わせたマスデータのなかの一つにすぎないのではないか、と強く感じさせられる機会が増えてきました。

例えば、アマゾンで本を買おうとすると、その下に様々な関連書籍が紹介されます。「あなたはこういうものに関心をお持ちではありませんか？」と問いかけてきて、やはり、それは自分が欲しいようなものなのです。意識的であれ、無意識的であれ、確かに自分がほしいと感じるものがスムーズに手に入る世の中になっています。

一方で、それは①一消費者として、すべて見透かされているということの表れでもあります。

マーケティングの用語で②ペルソナという言葉があります。東京生まれの東京育ちで、私立の中高一貫校から一流大学に進学し、一流企業に就職した人であれば、こう考えているだろうとか、郊外に住んでいる三〇代の若者であればこういった行動をしている可能性が高いといった、データに基づいて想定された架空の人物像のことで、商品設計や宣伝計画に使われます。ある属性を持つ集団のデータを基に、最大公約数としてペルソナがつくられるわけですが、そういったものから生まれる情報や商品に囲まれる生活を経て、自分たちがペルソナにより近づいていく、その上をなぞらされているのではないか、という感覚にとらわれることがあります。すべてのことは計算し尽くされており、そうした情報やデータに誘導されて生きている、あるいはそうした日常のうえにささやかな夢を見させてもらっているという感覚です。そして、そこから自らの世界を逸脱し、③ストレインジなものに出会うことが無くなっているかのような世界の閉塞感も生まれています。

想定された世界から出なくなっている、ということの背景には、市場の成熟や流通の発達があると考えられます。

全国津々浦々、どこに行っても、コンビニさえあれば温かいお弁当が食べられる。ユニクロや無印良品などで、これまでと比べて格段に安く、かつ十分に質がいいものが手に入る。自らの枠を出ずとも満足はできる生活がしやすい世の中になりました。そのため、今の生活への不満、豊かさへの渇望として、ストレインジなものを求める動機付けで動く人が減ってきています。

この消費環境の整備は、情報についても言うことができます。

以前は、自分が欲しいモノを見つけるために、必死に情報を追い求め、アクセスする仕方を身につけなければなりませんでした。例えば、新社会人がデートで使いたいおしゃれな店を知ろうとすると、④背伸びした雑誌を買いあさったり、センスのいい先輩にかわいがられるようにしてとっておきの店を紹介してもらったりといった、様々な手間がかかってきたわけです。

しかし、今はインターネットで条件を入れてbケンサクすれば一発です。店内や料理の写真、他の人のレビューも出てきて、店に下見に訪れなくても、だいたいの雰囲気を知ることができます。もちろん、［　A　］は出ませんが、目的を果たすのに十分な店はすぐに見つけることができます。

さらにインターネットで探せば世界中のほとんどの物や場所を見ることができてしまいます。もう少し鮮明な映像を見たければ、解像度の高いハイビジョン映像を見ればいいでしょう。ハイビジョンになると、まさに空気感まで映り込んでいるようなリアリティがあります。

最近若者が海外に行かなくなっているといいますが、その理由の一つに、テレビやネットでの情報で満足してしまって、そこに未知の驚きを見出せそうにないからというものがありました。もちろん実際にその場に身を置くと圧倒的な刺激があり、予想もできなかった発見ができます。ですが、自分の部屋にいながらにして世界の隅々まで見られるようになったことで、そういった刺激を想像できなくなっているようです。さらに深刻なのは外の世界に身を置くことがなくなることにより、自分がいる世界を相対化する機会が失われることです。その結果、自分がなぜここにいるのか、その必然性を感じることができず、自身の存在意識が希薄化することにもなってしまいます。

私たちは『モダン・タイムス』以来、チャップリンが問題にしたような機械文明に対する違和感を持ちつづけてきました。ですが⑤今や違和感が消えて「人間なんてそんなものだよ」という諦観が広がっているように見えます。

どこからか「この世の中にオリジナルな生き方なんてないんだよ。おまえも一つのデータにすぎない」という冷酷なc囁きが聞こえてくるようです。

Ⅱ

データを集積すれば、私の人生には必ず最適解があるという考え方に立つと、それは使命や志とは違って社会における有用性が評価基準になります。そして、自分の持てる資源を最大限活用して何かをすると言った途端にシステムに組み込まれてしまいます。

それでは、システムに完全にとりこまれないために、どうすべきでしょうか？

私はまず⑥俯瞰的な考え方にとらわれないようにすることが大事だと考えています。鳥瞰するのではなく虫瞰というか実存的な見方をする。そして、いま目の前に現れた景色にd委ねることです。

先ほどの都市の話でいうと、歌舞伎町のようなたとえ管理された異界であったとしても、やはり自分が生活しているエリアから越境して異界に入ることは非常にドキドキする行為であり、システムやルールからはみ出て自らの道を選びとっているという感覚からは、生きている確かさ、人間らしさを感じることができます。その異界でバカなことをしでかして再び山手線に乗ったときに元の自分に戻ってくるわけですが、ボーダーを越えて行ったり来たりする通過儀礼は私たちに［　B　］的な意味を与えてくれます。

都市内の異界に入るのには、外国に行くのと同様のドキドキ感があります。たとえば、南米の

街を歩いていたら、日本人だと襲われるのではないかとか、道一本隔てた裏通りは犯罪のにおいがするとか、このエリアは安い食堂が並んでいて楽しそうだとか、さまざまなことを感じます。

あるいは、フランスの北西にある有名な小島でモン・サン＝ミッシェルをめざして歩いていると、まず世界遺産にも登録された修道院の塔の先端がチラッと見え、さらに近づいて行くと広場に入ったときにいきなり眼前に姿を現したとか、自分がその街を通過していく感覚、目的地に近づいていく感覚、あるいは遠ざかっていく感覚を通してそこに世界があることを感じているわけです。その都市を鳥瞰してしまうとそうした感覚をｅソウシツしてしまうのです。

情報を入手して見ているかぎりでは、そこの場所はいつ行っても同じだという錯覚があるわけですが、実際には同じ場所でも刻々と変わっていきます。天候も温度も湿度も変わっていくし、朝と昼、夕方と夜では全く違う相貌を見せます。あるいは、その人が行ったときにたまたま来ていた人たちも全く違う人たちです。そして、そこで出会った予想を超える景色や思いがけない人たちこそが、私たちに新たな視点を与え、次の一歩を踏み出すヒントを与えてくれることも少なくありません。

アメリカの社会学者のマーク・グラノヴェッターが提唱した「弱いつながり（weak tie）」という概念があります。ふだん付き合わない人たちから受ける情報、刺激、示唆といったものが、重要だというもので、アメリカにおいてホワイトカラー労働者がどのような経緯で今の職を得たかを調査し、ふだん会わないような人たちからの情報が、今の職を決めることに役立っているということを［　C　］的な研究から明らかにしました。人間が［　D　］的に扱われ流動化する一方で、自分の身の回りでは「強いつながり」の存在感が増し、鎖のようになっている今の世の中においては、自ら「弱いつながり」の中に飛び込み、⑦一期一会を大切にする重要性はより増しているように思います。

情報を集積し、いくら世の中を俯瞰的に見たところで、そこには自分という存在は立ち現れてきません。逆に偶然性に身を委ねながら、いまここにいる自分の確かさを感じられたとき、人は自分をかけがえのない存在として社会の中に見出すことができます。

（上田紀行『人間らしさ』より）

問一　二重傍線部ａ～ｅについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部④「背伸びした」、⑦「一期一会」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

④背伸びした

ア　最新の
イ　分不相応な
ウ　簡単には手に入らない
エ　価格の張る
オ　趣味を異にする

⑦一期一会

ア　定期的な関係
イ　一時的な出会い
ウ　想定外の関係
エ　一生に一度の機会
オ　非日常的な出会い

問三　傍線部①「一消費者として、すべて見透かされているということの表れ」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ゲームユーザーたちの対戦を通して個々のユーザーを感動させていること
イ　ゲームや買い物を通して地球上の情報をデータとして集積していること
ウ　データとして存在する一人ひとりを自由意志で生きているように見せかけていること
エ　様々なパラメータを掛け合わせたマスデータの一つが「私」にすぎないということ
オ　データの蓄積により欲しいと思うものがスムーズに手に入るようになっていること

問四　傍線部②「ペルソナ」とあるが、これを説明している箇所を本文中から二〇字以内で抜き出し、書きなさい（句読点や記号も含む）。

（下書き用）

問五　傍線部③「ストレインジなもの」とあるが、それと同様の意味をもつ表現を本文中から五字で抜き出し、書きなさい。

問六　空欄Ａに入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　口コミ上位の店
イ　名の通った老舗
ウ　隠れた名店
エ　お洒落な新規店
オ　人気の郊外レストラン

問七　傍線部⑤「今や違和感が消えて「人間なんてそんなものだよ」という諦観が広がっている」とあるが、「違和感」と「諦観」とは、それぞれどのようなことか。本文には、チャップリンの『モダン・タイムス』についての以下の文章がある。本文（以下の文章を含む）の表現を用いて、一〇〇字以内で説明しなさい（句読点や記号も含む）。

チャールズ・チャップリンの代表作であるアメリカ映画『モダン・タイムス』が制作された一九三〇年代は、産業社会が急速に発展を遂げるなかで人間が機械を使うのではなく、逆に機械に人間が使われているかのように、生活が産業社会に規定されはじめたという現実がありました。いまの社会はどこかおかしいという認識が広がる中で、チャップリンはそのような現実を、映画で滑稽かつ辛辣に描き切ったのです。

つまり、人間と社会との間の軋轢がクローズアップされたとき、あるいは、社会のあり方が人間らしい状態から乖離しているのではないかと思われたとき、私たちは人間らしさについて考えさせられるわけです。

（下書き用）

問八　傍線部⑥「俯瞰（ふかん）的な考え方にとらわれないようにすることが大事」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　俯瞰的な考え方をすると、社会における有用性を高めるための最適解として、自分の持てる資源を最大限活用することができなくなるから。

イ　虫瞰的な見方をすることで、システムやルールからはみ出すことなく自らの道を選択することができ、生きている確かさを感じさせるから。

ウ　システムにとりこまれないためには、俯瞰的な見方では得ることのできない、眼前の景色に身を任せるような感覚が重要だから。

エ　目的地を見失わないためには俯瞰的な視点の獲得は必須だが、システムに取り込まれないためには俯瞰的な視点だけでは不十分だから。

オ　情報を入手して、目の前の景色かのように見る視点に委ねることで、新たな視点や次の一歩を踏み出すヒントを得ることがあるから。

問九　空欄B～Dに入る単語を、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　実存　　イ　実証　　ウ　観念　　エ　交換可能　　オ　相互作用

問十　本文の内容についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　インターネット社会において、流通や情報の発達に伴い自ら出向かずとも質のよいものを得ることが可能になり、ヴァーチャルな世界を楽しんだりささやかな夢を育んだりすることで充分満足できるようになった。

イ　未知の場や異界に足を踏み入れるなど、予想を超えたものとの出会いにより、システムのなかのデータとしての存在ではなく、たしかに生きているかけがえのない存在として自分を意識することができる。

ウ　機械文明が当たり前の社会とならないように、ゲームや買い物をインターネットで一人で行うような弱いつながりよりも、現地を訪れ見聞を深めたり、他者と現実に話したりする強いつながりの重要性が増している。

エ　自分が本当に欲しいモノを手に入れるためには、情報を追い求め、効率よくアクセスする技術を身に付けるだけでなく、本当にそれが欲しいものなのかを見極める相対的に自身を見る鳥瞰的な視点が必要である。

オ　データ収集を通してシステム内の駒となり、データが集積されペルソナ化してしまった時代のなかで、外国へ行き見知らない人と出会うことによって、自身のオリジナルな存在価値は確立されていく。

（二）　次の文章は、奥田英朗の小説「ここが青山」の一節である。

三十六歳の湯村裕輔は、会社が倒産したことをある朝突然、知らされた。早速、妻の厚子は以前の職場に復職し、裕輔は家事を引き受けることにした。最初はうまくいかなかったが、やがては家事を楽しむほどになり、とりわけ、四歳の息子の昇太の弁当作りには闘志を燃やしていた。

以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

午後は昇太を連れて公園に行った。ブロッコリー巻きは中身をそっくり残された。

遊戯場では昨日の老人がベンチにいて、目が合うと笑顔で手招きされた。仕方なく自分だけ行った。

「今日も来ると思ってね、こういうものを用意してきた」

老人が紙袋から一冊の本を取り出し、裕輔に手渡した。『逆境に打ち勝つ50の名言』という本だった。逆境かあ。表情を保つのに苦労した。

「わたしはもう何回も読んだから、あなたに進呈しよう。働いていた頃は、苦しくなるとこの本から勇気をもらったもんだ」

「はあ、そうですか」

「たとえば、この言葉」横からページをめくった。「一代でスエキチ・グループを築いた大内会長の言葉だ。《苦しいときこそ種を蒔(ま)け》。これはね、人は、苦しいときは目先の利益に走りがちだから、そういうときこそ先を見ろ、というaキョウクンなんだね」

「はあ」

「実に素晴らしい言葉じゃないですか。あなたもね、失業は大きな痛手だと思うけど、今こそ先を見据えて活動するべきなんだよ。資格を取るとか、勉強をし直すとか。焦ってつまらない会社に入ることはない」

「……はい。そうですね」

「まあ、じっくり読んでください」

「ありがとうございます」

ううむ。明日からこの公園に来るのがつらくなりそうである。

逃げるようにして老人から離れた。遊びに夢中の昇太を横目に、今度は藤棚の下に行く。母親たちに一礼して、ベンチの隅に腰掛けようとしたら、アイちゃんのおかあさんから、「湯村さんの奥さん、お勤めなんですか？」と聞かれた。

「ええ、そうです。以前勤めていた会社に復職して」

「いいなあ、わたしもまたＯＬしたい」「スーツ着て出かけたい」「アフターファイブに飲み歩きたい」母親たちが口々に言う。

裕輔は曖昧に笑って聞いていた。当分主夫なのでよろしくお願いします、とでも言っておくべきか。迷っているところへ、アイちゃんが駆けてきた。

「ねえ、ママ。うちのパパの会社はいつトウサンするの？」

全員が凍りついた。アイちゃんの母親が顔をひきつらせる。「何言ってるのよ、あんた」

A　を吊り上げて叱りつけた。

「だってアイもパパと遊びたい」

「お休みの日に遊んでもらってるでしょ」
きつい口調に、アイちゃんがサイレンのように泣き出した。
裕輔はこの場にいるのが悪いような気がして、①そそくさと移動した。さりとて行き場はない。ジャングルジムが空いていたので、上まで登った。てっぺんに腰掛け、公園を見渡す。三十代の男はきれいに自分一人だった。空ではカラスが呑気(のんき)に鳴いていた。

裕輔の料理の腕前は格段に進歩した。いわしの蒲焼、などというものが手早く作れてしまうのである。きんぴらごぼうも難なく出来た。昇太の弁当に入れたら、全部食べてくれた。なんと、我が息子の味覚は和風だったのか。ブロッコリーを醤油で煮しめることを本気で考えた。
厚子は会社員生活をbマンキツしている様子だ。週末、接待ゴルフに行ってもいいかと聞くので、もちろんいいよと答えた。クラブすら握ったこともないのに、いい度胸である。いつぞやの一件(注1)に関しても、「あの馬鹿ポリ、もう踏み切りに立たなくなってやんの」とほくそ笑んでいた。基本的に外向的な性格のようである。もちろん、結婚前から知っていたのだが。裕輔はふと疑問を覚え、昇太を寝かせた後に聞いてみた。
「昇太を妊娠したとき、会社を辞めたじゃない。あれ、本当は続けたかったんじゃないの？」
「うん。できればね」厚子は即答した。
「どうして続けたいって言わなかったの？」

「ユウちゃんの実家の手前。お義母(かあ)さんに『厚子さん、仕事は辞めるのよね』って聞かれて。それがすごく②無色透明で自然な言い方だったから、つい『はい』って答えちゃったの」
「うそ。そんなことがあったんだ」
おふくろめー。腹の中で文句を言った。
「でも、昇太と毎日一緒にいられてよかったよ。今じゃいい判断だったと思ってる」
厚子が涼しい目で言い、裕輔は感動した。
「じゃあわたしも聞くけど、ユウちゃん、サラリーマン生活、いやじゃなかった？」
「べつにそういうことはなかったけど」
「でも、なんか、今のほうが楽しそう」
「まあ、そうだけど、それは失業して気づいたことだから。おれって家にいるほうが向いてるかも。そんな感じ」
「毎朝、駅に行くとき、パン屋のおばさんに会うの。店の前で掃除してるから。でね、笑顔で挨拶を交わすんだけど、目に同情の色があるの。『大変ね』『くじけないでね』って顔に書いてある」

厚子が［ B ］を八の字にして、cトイキ交じりに言った。
「そういうのなら、こっちのほうが凄い。なんたって『逆境に打ち勝つ50の名言』だから」
裕輔は公園であった出来事を話し、その本を見せた。「あはは」厚子が腹を抱えて笑う。
「そうか。我が夫婦は③世間の誤解を浴びているのか」
「ジェンダーってしぶといんだよ」

そこへ電話が鳴った。誰だろうと思って出ると、実家の母だった。噂(うわさ)をすれば、である。「あ

のね、おねえちゃんに聞いたんだけどね……」母が切り出した。姉には会社が倒産したことを告げてあったので、それが伝わったのだろう。
「大変だったねえ。大丈夫？ 無理しないようにね」
赤ちゃんの肌を撫(な)でるような声である。母はこの世の不況を呪い、政治家を批判し、気落ちしてはいけないと息子を慰めた。そして「おとうさんと代わるからね」と、電話をバトンタッチした。
父と電話で話すことは、ほとんどない。月に一度は様子伺いの電話をかけているが、毎回話すのは母だ。不仲でもなんでもないが、父と息子とはそういうものだ。
「ああん」受話器の向こうで咳払いが聞こえた。「おう、裕輔か」無理矢理作ったような穏やかな声だった。
「災難だったな」
「うん、まあね」
「ハローワークには通ってるのか」
「ううん。失業保険の手続きに行ったきりだけど」
「そうか。通ってないか。まあ、焦ることはない。四十を過ぎると職探しも大変そうだが、おまえはまだ三十六だ。いくらだって見つかるさ」
「うん、そうだね」
「蓄えは、あるのか」
「多少はね」
「困ったら遠慮するな。おとうさんたちは気楽な年金生活だ。大金じゃなければいつでも都合はつく」
「うん、ありがとう」
少し間があいた。慣れない会話なので、互いが少し緊張している。
「長い人生にはこういうことだってある」父があらたまった口調で言った。「晴れの日ばかりではないし、嵐の夜だってある。ただし、やまない雨はない。いつか、おまえの空だって晴れる」
「ああ、そうだね」
答えながらどぎまぎした。父は息子への励ましの言葉を一生懸命考え、今、それを伝えているのだ。［　C　］。
「この国で飢えるということはないから、悲観するな。楽観してればいい。今の土地にこだわることもない。人間いたるところ……」
うっ、またしても(注2)――。裕輔は身を硬くした。
「青山ありだ」
安堵した。父は「ニンゲン」ではなく、「［　D　］」と正しく読んだ。「［　E　］」も。さすがは元教員である。
「人間」は世の中のことで、「青山」は墓場のことだ。だから「人間到る処青山在り」とは、「世の中、どこにでも骨を埋める場所がある」という意味なのだ。
父が「厚子さんと話したい」と言うので、妻に受話器を手渡した。
「いえいえ、そんな」厚子がしきりに恐縮している。「わたし、そろそろ外で働きたかったんです」

背中を丸めて訴えかけていた。そして、電話が切れた後、「お義父(とう)さんに謝られちゃった」と

F をすくめた。

「苦労をかけて申し訳ない、せがれには必ず家長としての責任をd全うさせる、だって」

「あ、そう」裕輔はつい吹き出してしまう。

「ユウちゃん、家長として責任とってよね」厚子は口の端を持ち上げ、笑った。

「ええ、とりますとも。弁当、君の分も作ろうか？」

「あ、作って。会社の近くの店、ランチタイムになるとどこも行列で、ゆっくり食べられないのよ」

「じゃあ、きんぴらごぼうと、とりの唐揚げと、出汁巻き玉子と、あとブロッコリーもあるから……」 G 折り数えた。「あ、そうだ。出汁がもう切れてたんだ。今夜のうちに作っておこうかな」裕輔が腰を上げた。

「ねえ、わたし、先に寝ていい。疲れちゃった」

「もちろん」

「ふふ。奥さんもらった気分。みんなに自慢したい」

厚子は「ふぁわわわ」と、インディアンのように手を口にあててあくびを響かせ、寝室へと消えていった。

キッチンに立つ。手鍋に水を入れ、洗った昆布を底に敷いた。

そこで電話が鳴る。今度は誰かいな。出ると山科部長だった。挨拶もそこそこに、興奮した様子でまくしたてた。

「夜遅くにすまん。緊急事態だ。原田のやつがな、おれがナイス商事からスカウトされていることを嗅ぎつけて、自分も売り込みに行きやがった」

あれま、そうですか。裕輔は④眉をひそめた。こっちは「部長とコンタクトを取ってみれば」というつもりで教えたこと(注3)なのに。

「それがな、第二営業の連中を引き連れての売り込みだ。要するに、おれたちとコンペ(注4)しようって H 積もりだ」

「ええと……おれたち？」目を丸くした。

「至急対策を練る。明日の午前十時、新橋第一ホテルのカフェに集合だ。おれは五人連れて行く。その中におまえさんは入ってるが、原田は入っていない。おまえさん、めったなことでは怒らないだろう。そういうところ、おれは評価してるんだ」

「いや、あの……」

「条件は悪くないんだ。これまでの年収の八割を基本線として保証してくれるってよ。あとはおれたちの頑張り次第だ。業績を上げれば社内での独立もありうるし、そうなりゃあ、おれたちは経営陣だ。そうはないチャンスだ。これを逃すことはない。そうだろう」

「ええ、まあ、そうですが……」

「じゃあ明日な。おれはそのままナイス商事に押しかけようかとも思ってるんだ。だから背広着てシャキッとして来いよ」

まごついているうちに、電話を切られた。手にした受話器を見つめる。

ま、いいか。口の中でつぶやいた。明日起きて決めればいい。

お湯が沸いたので、中火にし、煮立ちかけたところで昆布を取り出した。続いて削り節を入れ、

弱火で三分間煮込む。火を止め、顔に湯気を浴びた。うん、品よく香っている。

少し置いてから、用意しただるにペーパータオルを被せ、ボウルの上で漉した。あとは冷ましてからペットボトルに入れ、冷蔵庫に入れておけばいい。

ついでにおかずの下ごしらえもすることにした。ブロッコリーは日持ちしないから、買ったその日に塩茹でしたほうがいい。

冷蔵庫の中をe漁っていたら、奥から板チョコが出てきた。カレーに入れるために買ったものだ。昇太に食べられないよう隠してあった。

ふとアイデアがひらめいた。ブロッコリーを塩茹でして、溶かしたチョコレートで丸ごとコーティングするのはどうだろう。

弁当箱を開け、チョコがあると思って目を輝かせる昇太。大口で頬張る。中身はブロッコリー。

うっしっし。裕輔は想像するだけで笑ってしまった。

やらない手はない。⑤これは父と子の戦いなのだ。

もう一度鍋に湯を沸かし、そこに小さなボウルを浮かべた。割ったチョコレートを投入する。

たちまちしんなりして溶け出した。

カカオのいい匂いが鼻をくすぐった。⑥ここが青山でもいいと思った。

注

1　厚子が踏み切りで警察官とトラブルを起こしたこと。

2　裕輔は「人間到る処青山在り」という成句を元上司の山科部長と公園で出会った老人からも聞かされていた。

3　裕輔が元同僚の原田に、山科部長がナイス商事にスカウトされているのを話したこと。

4　公募による建築設計などの競技会。「コンペティション」の略。ここでは、山科部長たちと原田たちが、ナイス商事への就職をめぐって競うこと。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部①「そそくさと」、④「眉をひそめた」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①そそくさと

ア　急に
イ　気づかれないように
ウ　徐々に
エ　あわただしく
オ　遠慮がちに

④眉をひそめた

ア　不快に思った
イ　不当に思った
ウ　非常識だと思った
エ　不誠実だと思った
オ　無念に思った

問三　空欄A・B・F・G・Hに入る最も適当な漢字を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　眉　イ　目　ウ　鼻　エ　肩　オ　手
カ　指　キ　背　ク　腰　ケ　腹　コ　足

問四　傍線部②「無色透明で自然な言い方」とあるが、それはどのような言い方か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　妊娠したら女性は仕事を辞めるのが自然であり、いつまでも女性が仕事を続けることは自然の摂理に反していると思っている言い方。

イ　そもそも女性が外で仕事をすることは好ましくなく、妊娠したら仕事は辞めて、家事に専念するのが、女性の生き方だと信じて疑わない言い方。

ウ　妊娠したら仕事は続けるべきではないといった世間の常識を押しつける言い方ではなく、女性が妊娠して仕事を続けるのは大変だと心配する言い方。

エ　妊娠したら仕事は続けてほしくないといった義母としての思いを押しつける言い方ではなく、妊娠したら女性は仕事を辞めるのが当然のように思っている言い方。

オ　世間一般では妊娠したら女性は仕事を辞めるのが主流だが、あなたはどうするつもりなのか知りたいと思っている言い方。

問五　傍線部③「世間の誤解」とあるが、それはどういうことか。一〇〇字以内で説明しなさい（句読点や記号も含む）。

（下書き用）

問六　空欄Cに入る最も適当な表現を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　親は子供のことを少しも信用していない。でも言葉がありがたい
イ　親は子供のことを少しも理解していない。でも存在がありがたい
ウ　子供は親のことを少しも信頼していない。でも気持ちがありがたい
エ　子供は親のことを少しも理解していない。でも言葉がありがたい
オ　親も子供も互いを少しも信頼していない。でも存在がありがたい

問七　空欄D・Eに入ることばとして、最も適当な組み合わせを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　D　ヒトマ　　E　アオヤマ
イ　D　ニンカン　　E　アオザン
ウ　D　ジンカン　　E　セイザン
エ　D　ジンマ　　E　セイヤマ
オ　D　ヒトカン　　E　セイサン

問八　傍線部⑤「これは父と子の戦いなのだ」とあるが、それはどのような戦いか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　嫌いなブロッコリーを食べない息子と、様々なアィディアを用いて息子がブロッコリーを好きになるようにしたい父との戦い。

イ　嫌いなブロッコリーを残す息子と、好き嫌いはいけないことだとわからせるために、毎日弁当にブロッコリーを入れる父との戦い。

ウ　おいしくないものは食べない息子と、ブロッコリーをおいしく料理して、息子においしいと言わせたい父との戦い。

エ　父の作った弁当を残す息子と、息子の好きなおかずを多用するなどして、息子に弁当を残させないようにする父との戦い。

オ　弁当のブロッコリーを残す息子と、調理上の様々な工夫をして息子にブロッコリーを食べさせようとする父との戦い。

問九　傍線部⑥「ここが青山でもいいと思った」とあるが、どのようなことを思ったのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分は外で仕事勤めをするより家で料理をするほうが好きなので、人生の終わりを迎える場所は、キッチンでもよいと思った。

イ　自分は外で働くより家事をするほうが向いているかもしれず、料理をする楽しさも覚え、家で家事をして生涯を過ごすのもよいと思った。

ウ　世の中どこにでも自分を生かす場所はあるのだから、外で働くことにこだわらず、今だけは家族のために家事を極めることもよいと思った。

エ　自分は外で働くことが男の務めだと思っていたが、家事も大切な仕事であるのだとわかり、家事に一生を捧げてもよいと思った。

オ　人はどこで死んでも骨を埋める場所はあるのだから、外で働く人生をあきらめ、主夫として家で過ごし、この地に骨を埋めてもよいと思った。

問十　本文の表現や内容についての説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　裕輔が、働き盛りの男性が失職したことに対する周囲の反応を受け止める中で、ジェンダーの問題が浮き彫りにされ、親子や夫婦、かつての仕事仲間たちとの関係などを通して、自分のあり方を認識していく様が描かれている。

イ　「人間到る処青山在り」という成句を巧みに用いて作品を構成し、突然仕事を奪われた裕輔にとっての「青山」とはどこなのかを、周囲の人々が裕輔に示す「青山」に惑わされながらも、自らの意思で決めていく様が描かれている。

ウ　裕輔がある日突然仕事を失くしたことで、これまで知らなかった妻の一面を知ったり、息子の味の好みを知ったり、折り合いの悪かった父の優しい思いを知ったりすることで、新しい人生の生き方を獲得する様が描かれている。

エ　職を失った裕輔に対し、妻や両親は温かく見守ってくれるが、世間は表面的には同情しながら、本心は妻を働きに行かせる無能な夫という目で裕輔を見ていることが示され、日本社会で男性が失職することの深刻さが描かれている。

オ　老人に本を渡され、「逆境かあ」と思ったり、部長からの仕事に関する電話に確たる返事もせず、「ま、いいか」とつぶやいたりする裕輔を通して、失職して妻が働きに出ても、暢気に構えて適当に人生を楽しむ新しい男性像が描かれている。

（三）　次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

①あの歌手はマスコミに（　　）されて人気が急落した。
ア　バッシング　　イ　ヒアリング　　ウ　ブーイング　　エ　リスニング

②先輩が（　　）本、私も読んでみたいのですが。
ア　お借りした　　イ　お借りになった　　ウ　お借りになられた　　エ　拝借した

③雨露を（　　）ことができれば、どんな古い家でもかまわない。
ア　かわす　　イ　さえぎる　　ウ　しのぐ　　エ　とめる

④右手に（　　）と水をたたえた湖を見ながらバスは目的地に向かった。
ア　粛々（しゅくしゅく）　　イ　坦々（たんたん）　　ウ　滔々（とうとう）　　エ　満々（まんまん）

⑤校長先生が卒業生に（　　）の言葉をおくった。
ア　せんべつ　　イ　たむけ　　ウ　はなむけ　　エ　みおくり

⑥急な来客があり（　　）と部屋を片付けた。
ア　あたふた　　イ　おろおろ　　ウ　じたばた　　エ　せかせか

⑦威張っているが、しょせんあいつは（　　）だ。
ア　籠の鳥　　イ　借りてきた猫　　ウ　張り子の虎　　エ　蛇ににらまれた蛙

⑧彼の軽はずみな行動は（　　）できない。
ア　看過　　イ　助太刀　　ウ　黙秘　　エ　了解

⑨もう善悪の（　　）を自分でつけられる年齢だ。
ア　決断　　イ　独断　　ウ　油断　　エ　判断

⑩朝から思いがけない幸運が舞い込んできた。まさに（　　）からぼた餅だ。
ア　皿　　イ　棚　　ウ　天井　　エ　屋根